私の愛した零

BigBackBoom

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私の愛した零

【Ｎコード】
Ｎ２６４６Ｖ

【作者名】
ＢｉｇＢａｃｋＢｏｏｍ

【あらすじ】
近未来、人類未曾有の大混乱となったテロリズムから半世紀ほどたった。
世界各国は自分たちの利権を捨てて、平和連邦を設立した。
そんな怒濤の時代の中、政治家になりたくなかった二世議員、柊忠義はある少女との出会いで、世界に挑戦する事を決意する。

第一章　変わらないもの　（1）

第一章　変わらないもの

1

今年で一番強い風が吹いた。目も開けてられないほどに強く、寒さのあまり私はコートの端を掴んで、身を縮めた。春一番だったのかもしれない。

私は桜の木の並木通りに一つだけぽつんと置いてあるベンチに座って、懐から電子煙草を出して一息ついた。

何とも味気ない煙草だ。私はぶつぶつと文句を言いながら、煙草特有の副流煙の臭いひとつしない煙草を不味そうに吸い続けた。

煙草自体は違法ではないが、もう既に槍玉にする挙がる事がなくなっている。煙草を吸う行為が、他人から糾弾され差別されるべき対象になっているからだ。

違法でないからといって、仮にも衆議院議員が安易に吸っていいものではない。そして、仮にも若手議員、柊忠義、つまり私は何かとメディアで注目されているのだ。一般煙草を吸っていたら、政治家のイメージダウンになりかねない。

だからといって吸わないのも落ち着かないので、政府指定の電子煙草を渋々吸っている。

第一にミント味やコーラ味の煙草というのが気に喰わない。

しかし文句を言っても仕方がない

並木通りに咲く桜は綺麗な淡いなでしこ色で、木々の間から溢れる日の光が色を引き立てる。こんな綺麗なのにこの通りには誰一人いない。

街並や、自然はどこもかしこも変わっていない。

桜の木は変わらず綺麗だ。

ただ世界のシステムは大きく変わった。
二十一世紀初頭に起きた大災害。その時、私は生まれてなかったから詳しい事は分からない。学校で教えられた事一つ、史上最悪のテロリズムが起きたという事。それは、人々の価値観が一方的にねじ曲がった方向に行くだけの力があったらしい。
そして世界はそんな事が再び起きないように、「平和」を求めた。
完璧なシステムを禅世界が求めた。
そして、各国は打算等を全て捨て去り一つの巨大な連邦政府を作った。平和連邦。各国が参加し、足りないものを補いあい、各国が軍隊を捨てる事により国家間の戦争を完全に排除する。
最初はお互いのいい分だけ言いあいうまくは行かなかった。当然各国も言い分がある。簡単には大局的見地になって状況を見る事は不可能だった。
しかし、先人たちの偉大な努力により、少しずつ形を整えていった。
そして今できあがったのがこの世界。
まだ発展途上だが、全てのことが日進月歩で前に進んでいる。その中でも今一番重要視されているのが、スーパーコンピューターによる世界中の一人一人の人間のデータベース化。
そして日本が国家最大のプロジェクトとして始めた、バイオドールプロジェクト。それらは追々話していく事になるだろう。
私は空を見る、桜の花びらで覆われて、空は見えない。ただこれはこれで爽快眺めだった。
「柊さん、仕事サボタージュして、こんなところで桜見物とは随分といい度胸していますね、公僕のくせに」。セミロングのくすんだ茶髪の女性が私の顔を覗き込むようにして見てきた。
「そのサボタージュを決め込む、公僕の議員秘書もとんだ税金泥棒だよなぁ」。
女性は私の手首を掴み突然引っ張った。私は口にくわえた煙草が落ちないように気をつけながら歩き出す。
女性の身長は百七十センチぐらいありそうだ。女性の割には身長

が高い。ただスタイルはモデルと言われてもおかしくないほどだ。世間一般的な美意識から見たら、彼女は美人に分類されるのだろう。

彼女の名前は十文字かなえ。大学時代の一つ下の後輩だ。彼女は政治経済学部、私はロボット工学、全く関係のない間柄だったが、たまたま天文サークルで一緒になった。

その後はお互い自然に話すようになって、サークル内では一番仲が良くなった。大学を卒業した後もお互いに連絡を取り合っていた。

そんな時に大学を卒業してから、三年後。私が二十五歳の時に、事故が起きた。私の父、柊正二郎が飛行機事故で亡くなった。

地元の人間から絶大な支持を誇っていた彼を悼む人々は多くいた。しかし、政治は待ってくれず、次の候補者を見つけねばならなかった。

当然の如く白羽の矢がたったのが、一人息子の私だった。

大学院で研究をしていた私に、地元民は懇願を続け、まるで三顧の礼の如く、私はそれに耐えられず立候補した。

結果は見ての通り当選。

しかし、私は政治には全くの素人だ。

そこで私が助けを求めたのが、十文字かなえだ。最初は乗り気ではなかったが給料の話をしたら、二回返事で同意を得た。

本当の事を言うと彼女に政治的アドバイスは期待していない。ただ素人一人じゃ寂しいので、もう一人一緒に学んでくれる人間が欲しかったというのが本音だ。

「ほら速く歩いてください」。彼女は直も私の腕の袖を引っ張る。

私はそれを振りほどき、乱れたコートを直して彼女のペースで歩き始める。そろそろスイッチを入れなければ。

「今日の予定は？」。私が尋ねる。

彼女は黒かハの手帳を開いて目を通してから言った。「今日はこのあと海江田総理大臣との昼食を兼ねた会合。その後は零番地区のバイオドール研究所の視察です」。

零番地区に行かなきゃ行けないのか。嫌だな。あの街は嫌いだ。

「とりあえずは海江田総理との会合が一番です。重要事項らしいですし」。
私たちは車に乗り込んだ。ドアを閉めると車はゆっくりと動きだす。
「需要事項って、内容は聞いてないの？」。助手席に座る彼女に問いかける。
「えぇ。直接話したいと言っていたので」。
「まぁ時期が時期だから、分からないわけではないけどね」。
「え？　本当ですか」。彼女が振り返る。
「まぁな。メディアの私の扱いは知っているだろう？」。
「はい。なんでしたっけ？　若手の国会議員のホープ。国会王子。まるでアイドル扱いですね。忠義さん、まぁ顔立ち整って身長も百八十五センチでスタイルいいですけど、かなり『男』って感じだから、王子って感じじゃないですけどね」。
「余計なお世話だ。まぁつまりな、善くも悪くも、それなりに注目されているわけだ。それでいて日本では珍しい若い人材。是が非でも世界にお披露目したいと思わないか？　『日本は古木に捕われず。新しいほうに進んでいるって』」。
「まぁ何となくは」。彼女はまだ理解してないような困った顔でこちらを見た。
「しかもこの時期と言えば？」。
「あ！　そうだ来月には世界平和連邦合同会議があるんだ」。
「ご明察。つまり、それ関連で私に話があるわけだ」。
「なるほどねぇ」。満足そうに頷く。
ただ気に喰わないのが、結局それも建前を気にしての話だ。日本の政治家はほとんどが油ぎった、初老から中老で占めている。
今の時代こそ優秀な政治家が必要な各国はどんどんと若い優秀な人材を選出している。しかし、日本は保守的な爺さんたちの独壇場だ。
彼らは自分の立場が危ぶまれるような、人材を育てるような事は

しない。ただ、突然でてきた油田なら別だ。いきなり現れた油田は上手に利用すべきだろう。
政府は私を徹底的にプロパガンダに利用した。新人ではありえないような仕事の抜擢。さすがに内閣とまでは行かないが、後数年したらそれもありえない話ではない。
政治家なんて本当は嫌いだ。
建前ばかりで本質が見えていない。
「総理とはどこで落ち合うんだ？」。
「えぇと料亭高杉です」。
「あそこ料理が高いんだよなぁ」。
「幾らぐらいですか？」。
「冷やしトマトが千五百円ぐらいかな？」。
「税金の無駄遣いですね」。
「本当にそうだよな。会合なんてカラオケボックスで十分なのに」。
「それはそれで雰囲気ぶちこわしですね」。
「日本の未来はウォンウォンウォンウォン」。半世紀以上前のネタだ。
「それってメディアの主流がまだ物に頼っていた時代の物でしょう？」。
当時はコンパクトディスクと言われていた。その後は発展として大容量ディスクがでたが、次第にエンターテインメントメディアは全てデータ配信が主流になっている。
「時代は変わる、されど我らは変わらずだね」。
「何、爺さん臭い事言っているんですか？」。
「なんて言うか、懐古主義って言われても仕方ないけど、昔のほうがよかったなっと思ってしまったね」。
かなえは私を飽きれたように見て答えた。「皆が昔を美化しすぎなんですよ。素晴らしく便利な物の中に不便な味のある物があるから、皆有り難がっているだけです。私には記憶容量を物理メディア

に頼っていた時代がいい物だとは思いません。　持ち運びに不便ですもん。しかも今はクラウドネットワークが素晴らしく発展しています。メディアが持ち運びじゃないと不便なんて事はもうありません」。

正論だ。今はクラウドネットワークが全ての主流になっている。クラウドネットワークとは単純に言えば、大きなサーバークラウドに小さな端末、つまり個人の端末がそれぞれクラウドに接続されている状態。ここが送ったデータは、そこに接続さえすれば、どんな時でも引き出せる。そういうシステムだ。

昔、ネットワークは家でしか？ながらなかったし、携帯を介してでしかネットに？ながらなかったが、今は世界のどこからでもネットにつなげられるように街が整備されている。

私のような懐古主義は本来おかしいのだろう。

懐古主義なんて言うのはただの贅沢の延長なのかもしれない。

「もう変わらない物がいいなんて時代はこないのかな？」。

彼女は困ってように私を見て少し泣いたような悲しい笑顔で私に言った。

「ええ、きっと無くなります。ただ何時までも変わらないあなたが私は素敵だと思います」。

「君にはかなわないよ」。私は苦笑いをした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2646v/

私の愛した零

2011年10月9日13時45分発行